



旧能都町の歴史・文化の教材化の可能性(その1)

本校に来て3年目。今までに授業に取り上げた「地元ネタ」の一部を紹介します。

<歴史>

- ・真脇遺跡…これだけで「遺跡が教えてくれるもの」の授業が出来る。すごい！！
- ・いずがま古墳…なかなか見つけれなかった！ 田んぼの真ん中にあった！
- ・神目神社の奉納額…鯨捕り絵図。下記に説明有り。

ついでに、民俗資料館の中にもいろいろ資料がある。

<自然>

- ・常椿寺の大藤…植物の分類(豆科の植物)
- ・藤の瀬甌穴群…流れる水がつくる地形
- ・崎山の蓮痕…波の痕の化石。地層の勉強で見学してきました
ほかに、国道249号線沿いの地層、宇出津の海岸段丘の景色なども
- ・地震の被害…白山神社や役場の沈降
- ・ボーリング図…梶川の両岸のボーリングの柱状図の利用

<産業>

- ・うみさか…宇出津で捕れる魚、漁の方法など
- ・漁獲量…宇出津港での毎日の漁獲量をみる事ができる。年間を通した漁業の様子が分かる。

※

『北陸中日新聞』2010年1月30日号に「奥能登トリビア蔵」(<http://gozai.sakura.ne.jp/>)と題するHPの紹介が載っていました。能登町の有志が作ったサイトで、その目的は「奥能登に豊富に存在する(今、失われつつあるが)歴史文化を活用した複数のミニ博物館をパッケージにして発信するもの」だそうです。

さっそく見てみました。

このサイトには、旧能都町だけでなく、能登町全体の話も取り上げられています。『能都町史』『内浦町史』や『のと広報』などの記事から、テーマに沿ってまとめられており、とても読みやすくなっています。

その中から、一部を紹介し、地域の文化・歴史の教材化への可能性を探ってみたいと思います。「総合的な学習」でも取り上げられると思います。文章や写真はいずれも前述のHPのものです。

鍛冶職人(干場勝治さん)

この鍛冶という仕事を明治41年から3代にわたって守り続けているのが、宇出津の干場勝治さんだ。小さいころから父親の作業を見て育った干場さんが、本格的に鍛冶職人の道に進んだのは昭和37年、16歳のときだった。以来44年間、鉄をたたき刃を研ぎ続けてきた。

ひとつの製品ができるまでに数々の工程を踏む鍛冶の仕事は「一通り覚えるまでに15年から20年はかかる」という。

教材化の可能性

地元の産業、鉄の文化、季節にあった仕事(秋冬…鍬、夏…マキリ包丁)、松炭



ごいた

「ごいた」は漁師町である宇出津だけに今なお楽しませている伝承娯楽です。明治時代から盛んに行われて現在に至っており、その語源やいつ誰が考え出して広めたものかについては、はっきりとした資料などは残っていません。しかし、言い伝えや古老の話によると、創作者とおぼしき人物が二人浮かんできます。



その一人が、宇出津新町の商家の先々代・布浦清右衛門といわれています。清右衛門は、集魚灯を考案したり能登で初めて造花技術をもたらしたほどの発明家であったそうです。加えて無類の将棋好きで、この遊びを考え広めたといわれています。

もう一人の人物は、宇出津の棚木に住んでいた通称「三右衛門」といわれています。三右衛門は勝負事にはかなり研究熱心な遊び人だったので、この遊びを編み出したのではないだろうかといわれています。もしかすると清右衛門が考案した遊びに長けていたのでそう伝えられているのかも知れません。

教材化の可能性

地元の文化、材料は真竹(竹と生活)、公民館の行事(昭和 52 年より)、町おこし、仕事と余暇

鯨とり

「クジラとれれば七浜光る」これは、古くから能登半島沿岸に伝わることわざです。明治時代の文献によると浅瀬に流れ寄ったクジラの分配方法は、半分はその村のものとし、残り半分は左右 4 つの村と山手 2 つの村で分配したといえます。能登町沿岸の人々にとってクジラは特別な存在であり、沿岸地域にはクジラにまつわる伝説や地名が多く残されています。

右の絵図は藤波にある神目神社所有の絵図で嘉永六年(1853 年)、加賀藩第十三代藩主前田斉泰が能登巡見の途中、藤波の海浜で鯨捕りを見物した時の状景を描いたものです。町指定文化財で当時の漁業風俗を知る資料として、きわめて貴重なものとされています。



鯨とりの絵馬(神目神社:町指定文化財)

教材化の可能性

鯨とりの方法・道具(他の産業へも)、ドウブネ(杉)、漁の変化、鯨とり絵馬(神目神社、奉納)、

坂家 3 代(坂藁舟, 坂寛二, 坂担道)←旧内浦町の話ですが…

700 年以上前の悲恋伝説が残る恋路海岸。その一角に、若い男女の像が寄り添い、語り合うようにして悠久の時を刻んでいる。

「恋路物語」と銘打たれたその像は、恋路出身の彫刻家、故坂担道氏(98 年没・享年 77 歳)が 64 年に制作したものだ。同年、担道氏は第 7 回日展で特選を受賞している。



担道氏は 20 年 11 月 6 日、恋路に生まれ、松波小学校 3 年のときに母親と北海道札幌市に移住した。本名は坂青嵐(せいらん)。祖父は日本画家の坂藁舟、父親は油絵画家の坂寛二という芸術家一家であり、担道氏も 3 代目として画家の道を進もうとしていた。

しかし、生まれながらに色弱でピンクと水色の区別がつかなかった担道氏は、絵画では進学できず、彫刻の道に進む。彫刻家としての担道氏は、日展入選 9 回、64 年に特選、66 年には日展会員になるなど成功を収め、北海道を代表する彫刻家となる。

6 年には『丘の上のクラーク』像を制作。担道氏の作品として最も有名な銅像となった。

教材化の可能性

地元の芸術家たち、宇出津にある像、埋め込んであるレリーフ(商店街の取り組み・地域興し)